

(続紙 1)

京都大学	博士 (経済学)	氏名	堀林 巧
論文題目	自由市場資本主義の再形成と動揺－現代比較社会経済分析		
(論文内容の要旨)			
<p>1980年代末期以降の体制転換、市場経済移行は自由市場資本主義の発展をもたらし、資本主義経済システムの再編成がグローバルに生じている。本論文は、カール・ポランニーの社会経済学、D. ハーヴェイやJ. スティグリッツなどの現代政治経済学、レギュレーション学派などの比較経済学のほか、比較福祉資本主義論、経済を視野に収めるZ. バウマンやR. セネットの社会学を、現代比較社会経済分析と総称し、その成果を援用しつつ、戦後先進国資本主義の動態と多様性、ポスト共産主義国の資本主義化の動態と多様性、欧州建設における経済統合と社会的欧州の関係を検討することで、自由市場資本主義の再形成と動揺に関する理論的な考察を試みている。本論文は、体制転換期を自由市場資本主義再形成ととらえ、それを経済的次元と社会的次元から特徴づけ、社会的次元の重要性と再形成後の社会における政治と経済の摩擦に注目している。本論文は、政治経済学、市場経済移行論だけではなく、比較経済学の新しい視座の提供においても十分に貢献している。</p> <p>本論文は、次の6章から構成されている。課題と方法についての序章を踏まえて、第1章では、自由市場資本主義を考察する視座を、ポランニーに求めてその理論的意義を明らかにしている。ポランニーによる資本主義の見方、自己調整的市場の拡張と、労働(力)・土地・貨幣の商品化に起因する人間と自然の荒廃を防ぐ社会の自己防衛の「二重運動」の視点が検討されている。多様な資本主義への接近および社会経済学をポランニーの成果との距離において考察し、とくに社会主義経済、移行経済研究におけるポランニーの理論的な継承もまた検討されている。</p> <p>第2章では、戦後先進国資本主義の動態と多様性を自己調整的市場と福祉システムの対抗・補完関係という視点から考察されている。その際、福祉システムはポランニーの説く社会の自己防衛の運動から生まれた諸制度・政策の総体である。本章では、社会(福祉システム)が自己調整的市場の暴走を食い止めていた復興・高度成長期、国内市場飽和・利潤圧縮に対処する政策・制度の相違により資本主義の多様性が鮮明になる時期、自由市場資本主義が動揺する時期に時期区分して、主要先進国資本主義の動態と特質を明らかにしている。</p> <p>第3章は体制転換後の旧共産主義諸国における資本主義化の道を類型化とともに検討している。中東欧諸国のうち、ヴィシエグラード諸国、スロヴェニア、バルト諸国を分析対象としながら、D. ボーレとB. グレシュコヴィッチなどの研究成果を援用しつつ、ヴィシエグラード諸国を「埋め込まれた新自由主義」、スロヴェニアを「ネオ・コーポラティズム」、バルト諸国を「新自由主義」と特徴づけ、中東欧諸国に出現した資本主義は多様であったものの、いずれの資本主義も「汎欧州ネットワーク」あるいはグローバル資本主義に組み込まれたものであったと説いている。2010年以後のハンガリーの右傾化(右翼権威主義的統治、極右政党台頭)は同国における新自由主義化に相当する外資依存型に対する国民の反応と見る。</p> <p>第4章では、経済統合に基づく欧州を地域格差是正、ジェンダー平等、社会的(労使)対話促進など社会的欧州への試みから検討している。とくに本章では、EU東方拡大過程において、経済統合に比して域内格差是正など社会的欧州実現の試みは弱かったことを明らかにしている。単一市場と単一通貨創設過程、リスボン戦略におけるEUのスタンスを「埋め込まれた新自由主義」と規定するファン・アペルドーンの見解を</p>			

援用し、そのスタンスが東方拡大過程にも観察されたと主張する。

以上を踏まえて、終章では、1970年代に中南米で興り、1980年代に米英両国で成立し、1990年代以降、主要先進国資本主義経済、ポスト共産主義諸国の資本主義化過程、欧州建設路線に強く影響した自由市場資本主義を、主にハーヴェイの「略奪による蓄積」論に依りつつ再検討したうえで、2008年グローバル危機以後の自由市場資本主義の動揺、変容から経済システムにおける社会的次元の重要性を再確認している。

(論文審査の結果の要旨)

旧共産主義諸国の体制転換に関しては、移行の経済政策、マクロ・ミクロ面のパフォーマンスが注目されてきたが、本論文は移行過程そのものを自由市場資本主義化と捉えたうえで、その経済システム上の意義を考察することに焦点をあてた、「市場移行の経済学」を取りまとめようとする意欲的な研究である。本論文は、ハンガリーを中心として中東欧諸国における社会経済システムの変容に関する実証研究、とりわけ移行の社会的コストの実証研究を蓄積してきた著者の研究成果の延長線上に位置する研究であり、政治経済学、市場経済移行論だけではなく、比較経済学に新たな視座を提供しようとする研究成果と見なすことができる。本論文の学術的貢献は以下の点において高く評価することができる。

第1に、カール・ポランニーの視座を援用しつつ、本論文は自由市場資本主義を経済的次元と社会的次元の双方から考察することにより、旧共産主義諸国と先進資本主義諸国の総体において、自由市場資本主義化を明らかにしようとした点に独創性がある。自由市場資本主義の「再形成」が著者のもっとも強調する論点であり、このことは市場移行がその背後に位置した国際的な経済思想の影響力を抜きに説明できないことを示唆するとともに、本論文により政策論に傾斜した市場経済移行論を経済システム論に転換させることに成功しているといえることができる。

第2に、市場移行経済を自由市場資本主義との距離から類型化し、移行それ自体が多様であったこと、その多様性は移行の社会的なコスト（社会的次元）と不可分であることを析出している点である。ヴィシエグラード諸国、バルト、スロヴェニアでの類型化は同じEU東方拡大のなかにあっても、経済統合に異なる反応が生ずることを示唆するものである。とくに、外資依存が強い型では、社会的コストに対する国民の不満が右傾化を引き起こすなど、自由市場資本主義化過程は著しく分岐している。

第3に、ポランニーの視座の延長線において多様な社会経済学の成果に学ぶことで、意思決定、情報・調整様式、所有権、インセンティブといった伝統的な比較経済学の視座に加えて、社会的次元、とりわけ福祉・生活保障システムの視座が重要であることを主張している点である。市場統合の度合いからの分析に傾きやすい欧州統合の研究に対し、本論文は社会的欧州を分析の基盤にすえている。

一方、本論文には、以下のように十分に明らかにできず今後取り組むべき研究課題も残されている。

第1に、本論文は比較社会経済分析に関する理論的な成果の摂取と組み立てに焦点をあててはいるが、それに依拠した経済システムの実証部分については十分にデータを提示しているわけではなく、その表記においても説得的なものとはなっていない。とくに、企業・産業分析に関するデータにおいて不十分さが拭えない。第2に、ポランニーの視座を重視する反面、それと人口動態との関連、外資主導型資本主義化との関連など、ポランニーの視座そのものをなお再考する余地が考えられ、より深い検討が求められよう。市場経済化そのものが人口減少、大規模な外資導入を伴う過程である以上、本書の方法上の基盤におかれたポランニーの視座そのものを今日的に再検討することは要求される。第3に、本論文が焦点にあてた自由市場資本主義を考察する多様性と類型化の視角の有効性にはなお検討の余地がある。1970年代以降の自由市場資本主義に見られる収斂化と分散化の両方の傾向はどのような関係にあるのかは、さらに敷衍されてもよかった。

以上のような課題を残しているとはいえ、それらは本書の紙幅の制約と将来に向けた研究発展の方向性を示唆するものであり、本論文が解明した貴重な学術的貢献

をなんら損なうものではない。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成26年8月28日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。